



土木學會長
博士 井 九 助 氏

○

『昔は隨分ケチな會員があつて會費徵收の集金を出すと、會員の會費は高いから準員に下けて呉れと、言ふ様なものもあつた。それは約二十年前に土木學會創立當時の主事であつた名井博士の追憶談である。

○

二十年前に主事であり、評議員であつた名井博士が、今日再び土木學會に會長と推された事は實に因縁の深い事で、博士に於いて感激無量であらう。然し其二十年間に我が土木學會が何の位に發展したであらうか、會員數

の増加か、基金の増加か、調査事業の増加かそれ等種々の方面に發展振りは見られるのであるが、同時に時勢の進歩と共に他の學會に於ても異常な進歩を示してゐる。一例は建築學會に比較してさへ我土木學會の會員數は約半數にも達してゐるのである。

○

昔は工學界に於て、土木が先覺的地位を占めてゐた。今日に於ても技術者の數の點では我土木關係技術家は數萬人の多きに達するが其研究的實行力の點では遙に劣つてゐる様である。隨つて土木學會としても、又土木關係の出版物としても公共的に甚だ不振の狀態に在ると言はねばならぬ。

○

今日の世界の現状では土木は必ずしも舊い形式にのみ囚はれてゐる時代ではない、其關係する在ゆる方面に研究實行の助長を圖らねばならぬのである。土木學者は單一の學會であるとしても、今日では同一種類の種々なる團體あり、研究機關あり、雑誌あり、出版物があるのである。其等を否定して學會のみ獨り超然たる事は出來ない。實際に最高權威を保有せんとする我が土木學會の前途は多忙なりと云ふべきである。斯る際に名井博士の如き社會性に富んだ人を會長に得た事は寛に適任であると思ふ。

○

從來は研究的な學者肌の人を會長として推薦されたが、學會必ずしも純學者を以て適任としない、幸にして名井會長の抱擁性と副會長大河戸博士の純學者肌の研究性とが權威ある土木學會の發展途上を力強く彩るものと信ずる。

○

名井博士は明治二十五年東京帝國大學を出で直に内務省に入り、名古屋土木出張所に勤務する事實に十八年間の永きに及んだ此間に木曾川、九頭龍川、敦賀港等の改修工事に努力された。其後東京土木出張所長としては利根

川、荒川等の改修工事に當つて、所謂日本の近代的治水事業の實行期をなした人である。

一昨年土木學會長に當選された中川内務技監などより寧ろ先輩の方であるが、名井博士は大正七年三月以來東京を離れて北海道の拓殖計畫に全力を注いでゐた爲に自然中央から忘れられ、推薦が遅れたわけである。

名井博士が北海道に赴任せらるゝ迄は、北海道の各種土木事業は各所獨立した制度で何等技術的な統制がなかつた、有名な小樽築港工事でも釧路築港工事でも各獨立した組織でやつてゐた。然るに北海道の土木事業が次第に擴大されるに隨つて、全土木事業を統制するの必要を生じて内務省から名井博士が赴任する事となり、北海道最初の勅任技師として臨み、先づ内地に於ける技監以上の實權を以て北海道の石狩川を初め三十六河川の治水計畫其他の各種土木事業を統制する事となつた。最も其以前に北海道には岡崎文吉博士がゐて土木事業に參劃してゐたが、名井博士赴任に先づて支那の治水事業に招聘される事になつた。

名井博士が北海道で最も努力された事は、第二期北海道拓殖事業の二十年計劃である。總豫算實に九億六千萬圓の内70%の土木費を有するもので、港灣、道路、治水、土地改良等の土木事業を基本とし、米收穫三百萬石の自給自足案を初め、人口增加の對策及び各種產業の一大發展を含むの計劃である。而して昭和二年まで此等大計劃の實行に就いて名井博士の功勞は大なるものであつた。先年後進に途を拓いて圓滿職を退き、目下は伊藤長右衛門氏が勅任技師として名井博士の後を繼いでゐる。名井博士は山口縣の人、現在は市外代々幡町代々木上原1173の閑靜なる邸宅に謠曲園墓の趣味生活の傍ら民間工學教育にも關與されてゐる。名井博士は交友中々に博く特に故廣井勇博士とは懇親の間で、先年廣井博士記念事業會の副會長として、盡力された事は斯界に尙ほ記憶の新なる處である。